【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　英語教授学領域
後藤　隆昭

【論　　文　　題　　目】　英文記事ライティングのジャンル分析と教育的応用に関する研究
―「見聞録コーパス」に基づく言語学的分析を中心に―

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ニーズ分析等を踏まえて、ジャンル・コーパス分析により英文記事ライティングとしての見聞録の言語学的分析を行い、大学における英文ライティング教育に応用することを研究目的としている。

最初に、他大学の学生・教師に対する質問紙調査によるニーズ分析及び大学英語教育における実践事例調査を行った結果、英文記事ライティングのニーズが存在すること、ものづくり・地域発信・ジャンル意識を高める指導等の要素が、英文ライティング教育のシラバス開発の参考になることを指摘している。

先行研究では、ジャンル分析の理論的背景として、SFL (Systemic Functional Linguistics; 選択体系機能言語学)、ESP(English for Specific Purposes; 特別目的のための英語)、New Rhetoric の 3 つのアプローチを、言語学的・社会学的・心理学的志向性の視点から比較しつつ、ESP を中心に SFL のアプローチを取り入れた研究方法論を提起している。また、Swales の Move 分析、Bhatia の Steps アプローチ、コーパス分析等のジャンル分析法についてレビューするとともに、ソフト・ニュースとしての特集記事のジャンル的特徴をリード(最初の段落)、記事の構成・種類等から明らかにしている。さらに、英文記事ジャンル分析の先行研究を踏まえ、外国人が書いた日本の文化的事象に関する見聞録を特集記事の下位ジャンルとして位置づけ、コーパス分析により研究する必要性を述べている。英文記事ライティングのモデルとなる見聞録をコーパスとして構築・分析する研究は先行研究には見られず、その独創性は十分に評価できる。

見聞録として、日本在住の外国人ジャーナリストを筆者とする「かながわ見聞録」「ETIENNE’S COOL JAPAN」を新聞記事から収集し、それぞれ独立した特殊目的コーパスを構築した。また、各コーパスに基づき、コーパス分析プログラム(AntConc)を用いて、語彙頻度分析とともに、米国の汎用コーパスである ANC(American National Corpus)の書き言葉を参照コーパスとした特徴語の分析、既存の Move 分析モデルの直接的な応用が難しいことから、導入部・展開部・終結部毎のサブコーパスを構築し、テクストの各位置ごとの特徴語の抽出・分析を行った。さらに、特集記事のリード分類に基づくリードの分析に加えて、助動詞のモダリティ分析及び SFL の枠組みであり、人間の外的・内的経験に対応する文法的範疇である物質過程・心理過程・関係過程を活用した動詞の過程型分析を、テクストの各位置ごとに行った。テクスト位置分析、質的なリード分析、SFL のアプローチによる過程型分析は、分析手法としての独自性がある。「かながわ見聞録」については、4 語での n-gram 分析により lexical bundle を抽出し、帰納的分析により、理由表現、知覚・認識表現等にカテゴリー化している。考察では、分析結果に基づき、見聞録のジャンル的位置づけを、先行研究や上位ジャンルとの比較及び類似ジャンルである旅行記事とのコミュニケーション目的の相違等の観点から改めて明確にしており、ジャンル・コーパス分析の方法論への示唆ともなっている。

教育への応用では、ニーズ分析・事例調査、見聞録のジャンル・コーパス分析の成果、SFL を中心としたジャンル・アプローチの教育法を踏まえ、Vygotsky 理論を背景とした社会的相互作用・足場かけ、ジャンル意識を重視した Teaching and Learning Cycle モデルの有効性を提示している。また、大学生を対象とした英文雑誌発行プロジェクトに基づいて、実際に外国人に地域を紹介する英文雑誌を発行し、その成果を反映した具体的な英文ライティング教育のシラバスの提案を行っている点は評価に値する。

全体的に、理論的背景・モデルにも十分に配慮し、分析と教育への応用を通じて、ESP アプローチとともに SFL の枠組みも効果的に援用して研究を行った点は、研究方法としての意義が認められる。以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成２３年１月１３日(木)に、社会文化科学研究科長室において、審査委員５名の参加のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表がなされた後に、口頭試問が行なわれた。学位論文の成果及び関連領域の学識に基づいた応答が適切になされ、申請された学位論文が学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査　山下　徹
委員　合田　美子
委員　福澤　清
委員　荻野　藏平
委員　千島　英一